

Title	セシリー・マクワース「若きマラルメ」(三)(翻訳)
Sub Title	« The Young Mallarmé » de Cecily Mackworth (3): traduction
Author	Mackworth, Cecily(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature Françaises). No.44 (2007. 3) ,p.83- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070331-0083">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070331-0083</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## セシリー・マクワース 「若きマラルメ」(3) (翻訳)

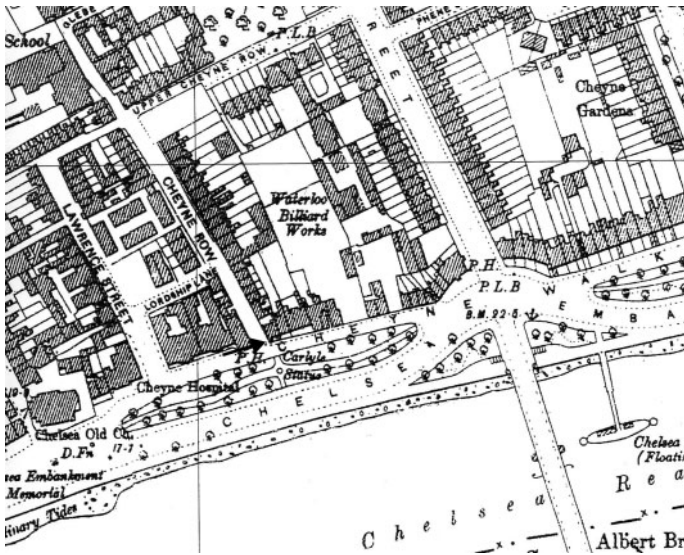
原 山 重 信

料理の匂い (承前)

その若い男女の変則的な状況は、彼らを孤独へと追いやった。ステファヌは、心配するデモラン夫人が「ロンドン社会の全ての高貴な階層の人びとに、そして特にいくつかの小教区（カトリックの小教区は勿論）の教区長たちに、さらにワイズマン枢機卿にまで……」と友人の一人に断言したように、最も伝統的な遣り方で、彼を推薦する祖父母からの紹介状を準備するようになっていた。「あの子があの人たちと近づきになって、引き立ててもらおうという気持ちが十分ありさえすれば、このような知り合いが彼には役に立つだろうと私たちは考えるかもしれない<sup>1)</sup>」と彼女はいぶかしげな様子で付け加えている。

彼女の孫息子〔マラルメ〕は、勿論これらの役に立つ知り合いのいずれとも近づきになれなかった。パリで味わい始めていて、ここで期待したように思われる種類の文学的生活も得られなかった。デ・ゼッサールが紹介してくれたオランプ・オドゥアール<sup>a)</sup>のサロンのような魅力的な文学サロンは、確かにはるか遠く、パリの文学界の刺激的な知的自由もそうであった。マラルメは、作家がまだロマン主義の伝統にすっかり染まっていて、芸術家が社会に対する反抗者であってその代弁者ではなく、若者たちが善悪の概念は芸術と関係ないと主張し、イギリスの全作家、画家があのように宗教的な敬意を抱いていた自然さえもが、もはや神聖なものではない土地〔フランス〕から来たばかりだった。「もし詩人が道徳的目的を追求したなら、彼の詩的な力は減少すると私は言っているのだ。そして、その作品は悪いものになるだ

ろうと請け合うのは無謀なことではない」〔「エドガー・ポーについての新しい覚え書き<sup>b)</sup>〕とボードレルは敢えて宣言していた。新しい産業革命に関しては、イギリス人にとって進歩と万人の幸福の約束を意味し、彼とその信奉者たちは、産業革命に恐ろしさと醜さしか見なかった。そこから「全ては、恐ろしささえもが、魅惑に変わる<sup>2)</sup>」新しい病的な種類の美を創り出したのだ。チェイニー・ウォークのカーライル<sup>c)</sup>の家に入り浸る文学の立法者たちにとっては、フランスの芸術界は唯一異質の憎むべき存在になり得て、たった一人、醜聞の絶えないスウィンバーン（未だほとんど知られていなかった）を除いて、誰も彼らに反抗する者はいなかった。数ヶ月後カザリスが「イギリスの詩人、或いはアメリカの詩人であっても、ポーに似て、同じく力強く、時には死の香りさえ放つ詩人は誰か見つけてみてごらん」〔1863年5月のマラルメ宛書簡〕と彼に促した時、彼は「ここでは僕は恐ろしく孤独だ。芸術のことや詩人たちのこと、〈理想〉のことを話せる相手もいない。ロンドンではいくらかでもましな若い詩人を一人として知らないんだ」



チェイニー・ウォーク

出典：『2500分の1 ロンドン検索大地図 1792-1897』 柏書房、1993年。

〔1863年6月3日付カザリス宛書簡〕と認めることしかできなかった。

差し当たりその頃、彼の外界との唯一の接触は、ヤップ家の人たちを通じてだった。一家は彼自身とほぼ同時期にパリを離れ、一時的にロンドンに住んでいた。ケイトとエティーは、その時代にしては進取の気性に富んだ若い女性で、自らジャーナリズムに手を染めていた。彼女たちは『クイーン』紙のパリ通信員として行動し、宮廷などのファッションや生活に関する生々しい記事を寄稿して、それに彼女たちは「エリアヌ・ド・マルスイ<sup>4)</sup>」と署名していた。そして友人たちからの手紙も、極めて説得力のある「パリ書簡」に素材を提供し続けた。カザリスはこの冒険に大いに迷惑を被った。この御陰で最愛のエティーが「口髭を生やした女よりもっとおぞましい」と見なしている青鞥の女の一人と化すのではと彼は恐れたのだ<sup>3)</sup>。とはいえ当座は、彼はあまりに惚れていたもので、不満を言うこともできなかった。ステファヌは手紙を運んだり、伝言を持っていたりして、二人の恋人にとって仲介者の役割を果たした。というのは、ヤップ氏はカザリスを好んでいたが、ヤップ夫人は婚約に厳として反対していたからだ。

ヤップ夫人はかなり厳しく、心配性の人物だったように思われるが、少女たちは陽気で、温かかった。今度は、マラルメはフローレンスと、まだ保育室にいた幼いイザベルという二人の妹たちと出会った。筋が通らないことが並んでいて、あのように想像力を刺激する伝承童話を彼が最初に学んだのは、恐らくイザベルからだった。「いくつかのイメージの間に正確な関係が創り出されると、第三の要素がそれらのイメージから引き出される。溶けやすく、透き通っていて、察知しやすい要素が<sup>4)</sup>」と彼は後に説明することになる。そして、「コック・ロビン」、「猫とヴァイオリン」などのなかに、彼は解放する暗示のちょうどこうした要素を発見したのである<sup>5)</sup>。そこで彼は多くの童話詩を暗記したり書き写したりして、後に翻訳し、自分の英語の授業で例として使うことになる。生徒たちがそれについてどう思ったかはわからないが、或る視学官は辛辣に「我々は、マラルメ氏は精神が錯乱していると思えない<sup>6)</sup>」と報告した。

ヤップ家の人々は著名な作家を大勢知っていた。ディケンズとサッカレー

は何度も訪れたことがあったし、ヤップ氏の『デイリー・テレグラフ』の同僚である、当時人気絶頂だったジョージ・サラもそうだった。マラルメがシュヴァリエ・ド・シャトラン<sup>6)</sup>と会ったのは(モンドール博士が示唆するようにデ・ゼッサールを通してであるよりはむしろ)ここでだったと推定する重大な根拠がある。

この並外れた老人は当時 60 歳を越えており、〔英仏〕両国で際立って多様な経歴があった。若い頃、教皇レオ 12 世の個性と思想を研究するために、パリからローマまで歩くことでいくらか名声を博したのだった。この偉業はさておき、彼の若き日の生活の多くは、大好きな、君主のからかいの追求に費やされた。シャトランは熱烈な共和主義者で、ヴィクトル・ユゴーとルイ・ブランの友人であり、少なからぬジャーナリストの才を捧げて、下品なバラードと扇情的な新聞記事を飽くことなく書き続け、彼の腹黒いけどもどもどを容赦なく攻撃した。ルイ=フィリップの王政下の時代にしばらくの間入獄の後、イギリスに居を構え、そこで帰化して一英国民になり、『英詩の美<sup>7)</sup>』という表題の記念碑的作品に没頭した。この書はチョーサーからテニソンに及ぶ 1000 以上の詩の翻訳を取めている。シェイクスピアの情熱的な崇拜者として、彼はマラルメと初めて会った当時、「シェイクスピア記念祭」という巨大プロジェクトに関わっていた。この行事は、詩人の生誕 300 年を記念する記念碑の建立のために全国的規模で基金を集めるためのものだった。一般の英国民と特に君主国がこの大きなイベントを見る冷やかさは、激しやすいシュヴァリエを激怒させた。ヴィクトリア女王は〔1861 年に亡くなったばかりの〕最愛の夫アルバート公のための〈記念館〉の建設を後援するのに忙しいあまり、シェイクスピアの記念碑のことは気に懸けなかったのも、シャトランの資金誓願は顧みられなかった。このように女王が実利主義を露わにしたことで、シャルル 10 世、ルイ=フィリップ、或いはナポレオン 3 世の罪を喧伝したのと同様に手厳しい論説を、シャトランは書くことになった。

「シェイクスピア生誕 300 年記念の式典は大失敗だった」と彼は辛辣に書いた。「式典はたった一つの理由から頓挫したのだ。それは現在の王室が、

恐らく職業上の嫉妬心から、天才の気高さを認めることを拒絶し、その家系全てと離れているという理由だ<sup>8)</sup>。ヴィクトリア女王は反応を示さず、シュヴァリエは殉教の満足感すら持たなかった。

シャトランは自分と少なくとも同等に非凡な女性と結婚していた。クララ・ル・シャトランはポンティニー家<sup>9)</sup>の「生まれ」で、夫と同様二カ国語を操る作家だった。彼女のためまず精力的なペンから、小説、短編、詩、お伽話、歌、そして翻訳が溢れ出た。彼女はまた、1877年に亡くなった後『ジャージー・エクスプレス』が回顧したように、疲れを知らない女主人でもあった。

彼女の晩餐会、仮装舞踏会、そしてもっとくだけた集まりは、すっかりロンドンの文学生活の名物になっている。ほとんど全てと言っていいような国籍の、様々な宗教的、政治的見解をもったシュヴァリエのいろいろな知人たちが、もっと尊大な集会には欠けているということがしばしばわかる、キャステルノー・ロッジ<sup>9)</sup>の家庭サークルに辛辣さを与えていた。

シャトラン家の人々は、「健康ナ精神ハ健康ナ肉体ニ宿ル」という信条を頑なに信じており、分刻みに管理された日課に従って生活していて、1日30マイルの散歩を厭わなかった。知的、体力的芸当は別として、この老夫婦は、お互いの献身によって世に知られ、授与委員会を主宰するハリソン・エインズワース<sup>9)</sup>と共に、ダンモウのベーコン賞<sup>h)</sup>の最後の受賞者に列せられた。

マラルメの彼らとの関係は、シャトランの書簡<sup>10)</sup>が発見されてもなお、幾分かはっきりしないままである。出版された書簡の中にたった1回しか言及がなく、この書簡は、続いて起こった出来事を考えるとかなり恩知らずに、「シュヴァリエ・ド・シャトラン、ロンドン在住のへぼ詩人」に言及している。この手紙は1864年4月11日という日付をもち、ほぼ1881年のシャトランの死まで続く長い愛情のこもった文通より前のものである。お互

いが紹介した友人たちを送りあった。シャトランは、若い友人の貧窮を心配して、お金をいくらか送り、子供たちに関心を持ち、幼いアナトールが亡くなった時喪に服し、悲観に陥った彼を元気づけた（「誰だって思うでしょう、あなたは60歳なのに私はまだたった22歳だと〔実際は逆でしょう〕。……あなたは私の悲しみの種です、そんなにお若くて、幻滅したあなたは。あなた自身の若さに気付きなさい、若き友よ」と、「立ち帰ル春」というソネットの草稿を受け取った時彼は書いた<sup>11)</sup>。彼が1878年5月11日に遺言書を作成した時、マラルメは主要な遺産受取人の一人で、二つの財産を受け取ることになっていた。一方は二人の子供のために託される120ポンドで、もう片方は当時かなりの額の800ポンドだった。彼はまた多数の文学作品（その重要性が疑わしいことは明白に違いない）も受け取ることになっていた。さらに記録は続く。「私の全ての個人的書簡と原稿、愛する亡妻の全ての個人的書簡と原稿は、彼が望ましいと考えるようなものは出版するというつもりで」、これは皆「私の利益と愛する亡妻のそれへの献身に対する感謝の徴として」。「君は若くて、元気いっぱい、勉強家だ」とシャトランは、友人マラルメに自分の意向を伝えて書いた。「君の人生の終わりが幸せであって欲しい<sup>12)</sup>」。この彼の「私の利益への献身」の言及は、シャトランの作品とクララの作品のためにフランスの出版社を見つけようというマラルメの努力を指しているようだ。これらの努力はどうやらうまく行かなかったらしいが、それでもやはり高く評価されたのである。マラルメは実際にはこのかなり多額の遺産を得ることはなかった。シュヴァリエは気難しく、喧嘩っ早い老人で、自分の遺言に添付された無数の遺言補足書は、彼の交友関係の揺らぎを跡付けている。しかしながら、この書簡は二人の間の仲違いの形跡も、よそよそしさの形跡も示してはおらず、マラルメは、老齢によって些かばげたシャトランが遺言を作ったり、作り直したりして行った単なる楽しみの犠牲になったものと思われる。いずれにせよ、1879年5月28日付の遺言補足書は、第二条項を取り消して、『若い女性誌』5巻、レイノルズの『論集』20巻とその他シャトランの蔵書の財産を、もっと確かに有り難い800ポンドと同様に与えないということになった。とはいえ、彼はもっと少ない遺産を本当

に手にしたのである。

ところで、ル・シャトラン夫人が50もの筆名で寄稿した無数の新聞・雑誌の中に『クイーン』紙があった。我々が既に見たように、ケイトとエティー・ヤップが、同じ新聞に寄稿し始めていたのだった。ヤップ家の人々は皆、シャトラン家と同様、二カ国語が堪能だった。両家ともフランスにもイギリスにも等しく精通していた。彼らは同じ職業に携わった。したがって、彼らがお互いを知るようになったのは当然のように思われるだろう。そして「コルネリー・ド・B. 伯爵夫人<sup>1)</sup>」は、若い友人たちにパリ通信を手に入れてやっていたのかもしれない。シュヴァリエはと言えば、彼の『英詩の美』の中にポーの詩のうち2篇<sup>13)</sup>を入れたという事実が、マラルメの共感をかき立てるのに十分だっただろう。シャトランの利益への彼の「献身」が、そのような感謝に値するのに十分で、書簡の中に何ら痕跡を残していないのは、一見奇妙に思われる。しかしマラルメの人生は常に、いわばいくつにも分割されているようなものだった。彼が本物の芸術家とみなしていない人々は、彼の現実をほとんど知ることがなかった。彼の本質的な礼儀正しさと情け深さにより、時として彼らがマラルメの現実と正反対のことを信じることはあったけれども。

ヤップ一家の若者たちは自分自身の交友仲間を持っており、マラルメは彼らと過ごす時間が益々増えていたようだ。〔1862年〕11月30日<sup>1)</sup>に彼はカザリスに陽気な手紙を書き、「魅力的な小パーティー」を描いている。ここでエティーは、その小さな感じのいい古代ギリシャ風のウェストを引き立たせていた「仰々しいクリノリンもない」ハイ・カットの茶色のドレスを着て「可愛らしく自然」だった。彼女は「あなたが楽園に辿り着いたと感じさせてくれるような仕方です」客たちを迎えたが、一方、「彼女の暗青色の目の中に輝く深い優しさから、彼女は熾天使のように見えた。それがクエーカー教徒へと化し、天国を彷彿とさせさえし得る」。その集まりの唯一の影はカザリスの不在だったが、エティーは自分の感情に関して何ら疑いの余地を残さない口調で彼のことを話していた。マラルメのほうは、心ゆくまで楽しんでいるように見えた。



それではこの間ずっとマリーに関してはどうなのか？ 彼女はヤップ家に連れて行かれなかったし、キャステルノー・ロッジのシャトラン家の接待にも招かれ得なかった。カザリスとの書簡の遣り取りの中での言及から、マラルメは、ヤップ家の人々のパリでの穏やかにボヘミア的な生活に惑わされて、彼らを信頼して秘密を打ち明けられると想像したかもしれないということが分かるが、彼らがマリーは弛んだ身持ちの女だと即座に結論を下すような「イギリスのお澄まし」だと彼は直に悟った。彼女は、小さなドイツの置き時計のカチカチいう音に耳を澄まし、お金の心配をして、自分がいるために家に決して誰も呼べないステファヌのお荷物になっていると感じながら、ただ部屋に籠もっていることしかできなかった。彼女の生きる世界はパントン・スクウェアに接していた。その近くの歓楽のための小さな場所へと右や左に一歩足を踏み入れると、彼女は卑猥と残虐の恐ろしい世界に投げ込まれるのだった。ここでは日中の買い物は、売春婦、ぼん引き、盗人、そして酔っぱらいたちがまだ安全に眠っている昼前に、素早くしなければならぬ。堅気の女性だったら昼を過ぎてからウィンドミル通りに思い切って踏み込むことなどできなかった。

また恐らく、何かが間違っていることを彼女は悟り始めていたのだ。マラルメがカザリスへの手紙の中で述べているように、彼女は「大人で、分別があった」。彼女は「パンチとジュディー」の操り人形劇がいいとは思えず、自分の恋人がこれに熱を上げるのを子供じみていると考えたことを示している〔1862年11月14日か13日のカザリス宛書簡〕。彼女は確かに彼の「古く、色褪せた物の好み<sup>14)</sup>」への喜びを同じくしたが、彼女の興味は純粋に家庭に関することであり、二人が共に交わす話題はあまりなかった。結婚の問題に関して、それ以上話されることは何もなく、彼女自身、あまりに慎重で、ステファヌに早まった生半可な約束を思い出させることができなかった。

とにかく、或る日、彼らがここに着いて1箇月足らずで、ステファヌがさらにもう一度ヤップ家を訪問して帰宅すると、彼女は涙を流して、彼の元を離れる準備をしていた。

二人して一晩中泣いて、ステファヌは「半ば妻……最良のパートナー」を

失おうとしていると感じた。しかし彼は彼女を思いとどまらせる努力をあまりしたとは思われない。実際、彼女が居なくなってからカザリスに向けて書きなぐり始めた自暴自棄の手紙の数々から、彼は彼女が居なくてひどく寂しがっており、良心から激しく自らを責めてはいるものの、彼女が戻ってくることを半ば望んでいたにすぎないことが明らかになる。次の数箇月間の彼の振舞いほどハムレット的両義性（彼は自らのうちに半ばふざけて、半ば悦に入ってそれを認めていた）に近いものは何もあり得なかったろう。

「僕はグロテスクで滑稽な道化だ」と彼はカザリスに書いた。「僕の手紙には注意を払わないでくれたまえ。いつか、そこからマリーが白ハトだということがわかるだろう。そして次に彼女に対して罰当たりなことを言うだろう。僕は自分の苦しみの度合いに応じて、「はい」、「いいえ」を言うだろう」〔1863年2月3日付カザリス宛書簡〕。

この苦しみは確かに深刻だった。恐らくさらに言えば、それが通常恋人たちの別れにつきものの、単なる心からの悲しみではなく、潜在意識の中の苦悶に満ちた古傷を目覚めさせるもつとずっと複雑な感情だったただけになおさら深かった。彼がためらい、動揺していた翌月の間に書かれた手紙は、通常の心配と悔恨以上の何かを露わにしている。マラルメには、自分が歴とした女性を見込みもなく無理矢理くどいたこと、彼の保護なしには彼女の人生は滅茶苦茶になってしまうだろうということがわかっていた。他方、自分がひどい間違いを犯したのであって、結婚でもしようものなら、博士号を準備し大学で出世するという野心が途絶えてしまうだろうということ、学士の学位のない田舎教師の冴えない生活を強いられるだろうということも悟り、またそのために、自分がそうした職には極度に不相応であることを既に悟っていたに違いない。

けれども、ステファヌが「日常世界は料理の匂いがする」〔1863年6月3日付カザリス宛書簡〕という言い回しで要約したその共同生活の月の幻滅にも拘わらず、彼はマリーが或る点では自分の一部であり、彼と別れたら死んでしまうだろうと未だに感じていた。「彼女は全てを失った。多分命を失いさえするだろう……彼女は悲しみのあまり死んでしまうだろうと思う。……

彼女はもう死んでいるのだ」。我が身を彼に託した処女を「汚し」てしまったという、つきまとして離れない罪悪感がそうであるように、この恐れは度々現れている。

実を言えば、勿論、マリーは今まで、彼の心の中で死んだ妹と完全に同一視されていた。初めはエティーが、次に彼女が、サンスで書き始められロンドンで完成した詩の〈まぼろし〉だった。そして、この推移は一種の順調な必然性をもって起こった。エティーは一つの理想のままであり得たし、実際にそうだったが、マリーは一つの実在として所有され、理解された以上、彼女はもはや神として崇められ得なかった。その時点から、彼女の存在は解決不可能な問題を提起した。所有は幻滅と、恐らくは或る種の憤慨をももたらす。それは単にマリーが現実存在するからだ。恐らくはまた、それは、母親や妹に関する幼少期のトラウマに基づいた実に多くの関係を破壊すると精神科医たちが言う、潜在的な近親相姦の恐怖を目覚めさせた。でもやはり別れはさらにもっと恐ろしい脅威を呼び起こした。別れは、それが起こるだろうとおぼろげに感じつつも防げなかった、何かの惨事後、非常に多くの場合、子供につきまとう根絶できない罪悪感を再び目覚めさせた。ステファヌが幼いマリーに死ぬことを「許した」小さな少年の頃味わった全ての恐怖と苦痛は、もう一人のマリーが、恐らく彼の過ちによって死ぬために彼の元を去った時、再び彼を打ちのめした。

このようにしてマラルメは、マリーが居なくなった後、完全に普通でない心理状態になっていた。この事例のさらにもっと一風変わった特徴は、彼が現に起こっていることを自覚している度合いだった。彼は確かに、新しいマリーと昔のマリーの同一化を深めようとしたように見える。多分、それがいかに豊かな詩の着想の源泉となるかがわかっていたのであろう。その空想は絶えずカザリスと共に論じられたが、この友人の目にはそれが正常であるばかりでなく、賞賛すべきものと映っていたように見える。双方にとって、ステファヌの死んだ妹は、彼の生きている恋人と全く同様に現実的な——或いは非現実的な——存在だったのであり、カザリスはマリーの出立の後書くのが自然だと思ったのだ。

僕がしたのと同じ決意をしたまえ、男やもめになったままでいるという決意だ<sup>15)</sup>。僕たちが失ってしまった人々に対する愛を哀れな<sup>k)</sup>まま保とうではないか。こうすれば、わかるかい、君はもっと孤独を感じなくてすむだろう。マリーは、ねえ、君の妹だ。彼女は平和と義務の生活に戻ったんだ。もう一人のマリーが天国に戻ったように。二人を呼び戻そうなんてするなよ〔1863年2月のマラルメ宛書簡〕(『書簡集』、pp.74-75.)。

マリーをブローニュまで送って行った後、マラルメはロンドンに戻った。パントン・スクウェアに戻るのはあまりにも耐え難かっただろう。そこで、彼はナイツブリッジのアルバート街〔テラス〕16番地に部屋を見つけた。彼は近頃成年に達したばかりで、僅かばかりのお金が自由に使えるようになっていたので、もう自分が貧乏だと感じてはいなかった。新しい部屋の家賃は1200フランに相当する額だったが、これは当時としてはかなり高価だった。このかなりの富は彼の悔恨の念を増大させただけだった。自分の振舞いを言い訳するのに貧乏を弁解に使うことはもはやできなくなったのだから。

ヤップ一家が3月にパリに戻って、彼は以前にもまして一層寂しくなった。彼は、9月に「習熟証明」の試験に確かに合格したのだから、自分の英語の勉強に取り組んでいたに違いないけれども、心の中にマリーの問題以外は何ら入り込む余地はほとんどなかったと思われる。良心の咎めが彼をひどく苦しめた。「僕自身の不幸はそのうちに消えるだろうということがよくわかった」と彼はカザリスに書いた。「そして6箇月したら僕は多分苦しまなくなっているだろう。……そう、僕は永遠に惨めではないだろう。しかしマリーは惨めだろう」〔1863年1月30日(または29日)のカザリス宛書簡〕。

夜には、不安な心から、マリーの死んだ母親の夢を見た。彼女は娘を誘惑し、それから彼女を「一房の枯れた花々のように」投げ捨てたと言って彼を責めていた。目が覚めると、<sup>ひとけ</sup>人気のない部屋と、外には友達のいない通りしかなかった。「僕は独りぼっちだ」と彼はやけになって友人に向けて書いた、「僕の黒猫と一緒に完全に独りぼっちだ。そしてこれは恐ろしいことだ」

〔1863年2月3日付カザリス宛書簡〕。

「秋の嘆き」と題する散文詩には日付がないが、それが、1864年の日付をもち、恐らくボードレルの『小散文詩』とアロイジウス・ベルトランの『夜のガスパール』に触発されて書かれた、一連のこうした詩の最初のものであったという徴候はある。少なくとも最初の段落は1863年のこの憂鬱な春

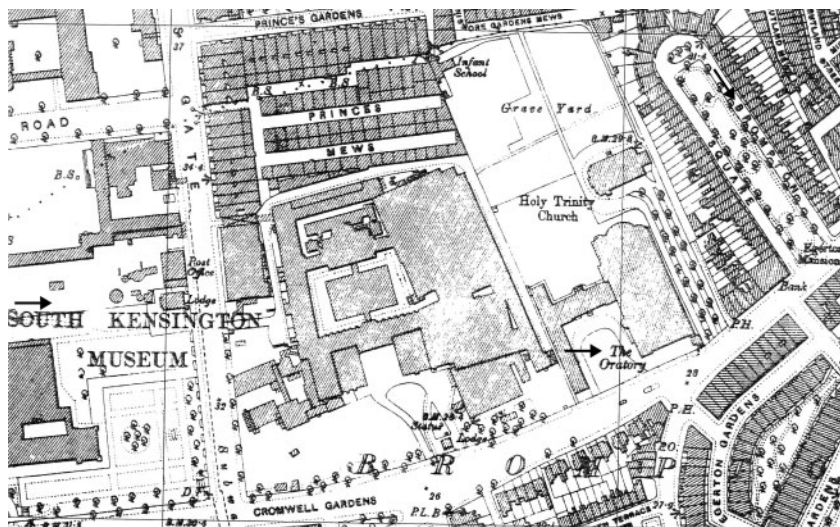


アルバート・テラス

出典：『2500分の1 ロンドン検索大地図 1792-1897』 柏書房、1993年。

の間に書かれたことはかなり確実であり、ナイトブリッジの貸間で独りで過ごした時期であるという形跡もある。冒頭の文句は、カザリスへのいくつかの手紙の雰囲気とぴったりと一致する<sup>16)</sup>。

マリアが僕のもとを去って別の星に旅立ってから——それはどの星だろうか？ オリオン、アルタイル、それとも汝、緑の金星か？——僕はずっと孤独を愛してきた。何と多くの長い日々を僕の猫と共に独りぼっち過ごしてきたことか！ 独りぼっちというのは、何ら肉体的存在なしに、という意味だ。というのは、僕の猫は一精神であり、神秘の相棒だからだ。だから僕は長い日々を僕の猫と共に独りぼっち過ごしてきたと言えるのだ。ローマの退廃期最後の作家たちの一人と共にと言ってもよい。というのは、白い存在が僕の人生から消えてから、「凋落」という言葉に要約されるもの全てに奇妙で、説明のつかない愛情を感じてきたからだ。〔「秋の嘆き」〕



ブromptン・スクウェア、ブromptン小礼拝堂  
 出典：『2500分の1 ロンドン検索大地図 1792-1897』 柏書房、1993年。

何度となくどちらか迷った後、英仏海峡を慌ただしく行き来して、4月の終わりに、マリーが今度はステファヌのフィアンセとしてロンドンに戻ってきた。その若い男女はブロンプトン・スクウェア6番地の新しい貸間に落ち着いた。マラルメの家庭は今や、甘んじて必然の運命を受け入れており、彼の未亡人になったばかりの義母はそうあり得ると思っただろうよりも理解を示してくれていた。カザリスさえも彼が正しく行動していることを認めたが、デ・ゼッサールだけが独身の旗印をいやいやながら振り続けていた。

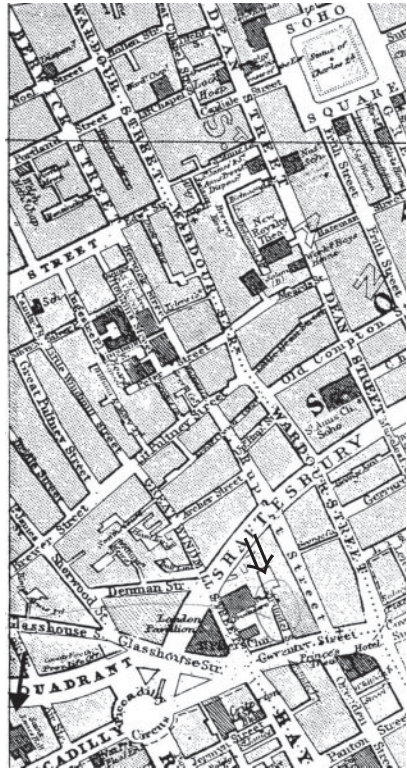
一旦決定が下されると、マラルメの気持ちはより真剣になったように見える。カザリスへの手紙はもはや苦しみの流露ではない。もう一度彼は身の回りのまだ奇妙な生活に或る種の興味を抱いていた。その恋人たちはリッチモンドへテムズ川の舟遊びをしに出掛け、感傷的なマリーは夕刻の手紙に忍ばせるべく、勿忘草を摘んだ。彼らがボートを係留しようとする、流れが彼らを押し流した。「僕も時代の流れに漂っていて、自分がどうやって生きているのかほとんどわからない」というのがステファヌの解説だった。

それから彼は初期の共和主義者と自由意志論者の熱狂の記憶のいくつかを呼び戻そうとした。7月22日にセント・ジェームズ・ホールで、ポーランド、その「今やロシア皇帝によって踏みつけられようとしている大変勇ましくも不幸な人々」（ある弁士がこう表現した）を支持する集会が開かれた。ザモイスキー将軍が出席していて、フランスの労働者の代表が、特に、靴屋のオグデン氏率いるイギリス労働者委員会と力を合わせるために、英仏海峡を渡っていた。会議は「ポーランドを救え。国旗を掲げよ」という決議をした。共和主義者のフランスからの亡命者たちは、この種の集会でいつも非常によく目立っていて、ポーランドやハンガリーが独立の要求を提出した時、その大部分が大挙して現れた。「ガリバルディ主義者」マラルメは、群衆に賛成すべきだったと感じて、翌日、さらに演説を聴きに群衆がハイド・パークに再び集まった時、彼もその場にいた。興奮は前夜と同じくらい高かったが、彼自身は依然として心を動かされず、自らの政治的情熱——決してさほど激しいことはなかったが——は完全に冷めてしまったことを認めざるを得なかった。実際には、彼は、弁士が「紳士たち」と呼びかける度に、聴衆の中の

労働者たちが拍手喝采する姿に専ら強い印象を受けたのだった。彼らは「ぞっとする、高潔さのない中産階級」<sup>ブルジョワジー</sup> [1863年7月24日(または23日)のカザリス宛書簡] がそうでないのと同様、理想的な共和国に相応しくはないと彼は結論づけ、永久に政治に背を向けた。

結婚に先立つ数週間のカザリスへの手紙は、ほとんど彼らの諦めに甘んでいるように見える。ステファヌはもはや未来に関して何ら幻想を抱いてはいなかった。これからは、「料理の匂い」が彼の生活に染み渡ることになる。しかしこれは受け入れた断念の外面的で、ほとんど重要でない面にすぎなかった。マリーと結婚することによって、彼は青年期を通じて彼を力づけてくれた漠とした夢から、一つの実体を創り出そうというあらゆる希望を捨てていた。彼は最も屈辱的な部類の敗北を認めていたのだ。「この世がある主なのだ」<sup>あるじ</sup> [詩篇「窓」]。彼は浮世の世界がこれからずっと彼を飲み込むのを許してしまったのだ。

「もし僕が自分自身の幸せのためにマリーと結婚するとしたら」と彼は最終的な決断を下すに当たってカザリスに認めた。「それは狂気の沙汰というものだろう。いずれにせよ、この世に本当に幸せなど見出せるだろうか？ それに我々は自分の夢の中以外のどこにそれを本当に探すべきなのか？ ……いや、僕がいなければ彼女が生きていけないだろうからという理由だけのた



セント・ジェームズ・ホール

出典：[地図で読む] ヴィクトリア女王時代のロンドン(時代別ロンドン地図集成)本の友社、1997年。

⇒は、マラルメが最初に住んだ旧パントン・スクウェア。



めに、僕はマリーと結婚することになるだろう！」〔1863年4月27日付カザリス宛書簡〕

結婚式は8月10日にブロンプトン小礼拝堂〔Oratory〕で挙行された。そして、マリーは彼にとって素晴らしく、献身的な妻になり、彼女がすぐに「彼自身の反映」〔1862年10月初頭のカザリス宛書簡〕になるだろうという初期の予言をどうやら実現したらしいということも同時に記録されるべきであろう。

マラルメが、ブロンプトン・スクウェアの貸間から書いて、カザリスへの手紙に「襲撃<sup>17)</sup>」、「窓」という2篇の詩を同封したのは、結婚が既に決まっていたが、まだ式が行われていなかった6月3日のことであった。前者は、「夢のように微妙で、はかなく」、マリーの溢れんばかりに豊かなブロンドの髪に触発されて書かれたように思われ、恐ろしく入り組んではいるが、魅力的な幻想的作品である。後者は、彼の個人的ドラマに対してだけでなく、全ての象徴派の態度、〔19〕世紀のその後の間にヨーロッパの詩を席卷し、ここに浸透することになる処世の仕方と思考法に対する鍵として読まれ得る。イギリスの文芸の当世流行の風潮とこれほど全く合わない作品を想像するのは困難である。この詩は極めて重要であるので、恐らくここに全篇を引用すべきであろう。

悲しい施療院に飽き、虚しい壁に疲れた

大きなキリスト磔像のほうに向かってカーテンの月並みな白さのなかを上る悪臭の香にも飽き飽きして、

その陰険な瀕死の病人は、そこに年老いた背中をピンと伸ばし、

身を引かずって、自らの腐った体を温めるためよりは

むしろ石の上の陽の光を見るために、

痩せこけた顔の白い毛と骨を

美しく明るい一筋の光線が焼け焦がそうとしている窓にはりつけに行く。

そして口は、熱があり、青い蒼空〔ママ〕に貪欲で、  
そのようにして、若い頃は、その口は彼女の宝を吸いに行ったものだ、  
かつての純潔な肌を！ その口は今  
長く苦い接吻で、金色の生温かい窓ガラスを汚す。

酔いしれて、彼は生きている、聖油の恐怖を忘れて、  
煎じ薬、柱時計、そして押しつけられたベッド、  
咳も忘れ、そして夕べが屋根瓦のあいだで血を流すとき、  
彼の目は、光に満ちた地平線に、  
白鳥のように美しい、金色のガレー船が  
その船体の線の黄褐色で豊かな輝きを揺らしながら  
思い出の詰まった大きな物憂さのなかで  
緋色の、そして芳香の河の上で眠っているのを見る！

このようにして、己が唯一の欲求で物を食べる幸福に溺れて、  
子供たちに乳を含ませる妻にそれを差し出すために、  
その汚物を探すことに固執している  
頑なな魂をもったその男の嫌悪に捕らわれて、

私は逃げる、そして全ての開き窓にしがみつく  
そこから人生に背を向ける、そして、  
永遠の露に洗われ、〈無限〉の清澄な朝が金色に染める  
その窓ガラスのなかで、祝福されて

私は自分の姿を窓に映して天使である自分を見る！ そして私は死ぬ、  
そして  
——この窓ガラスが芸術であってほしい、神秘性であってほしい——  
我が夢を王冠に戴きながら、  
〈美〉の花咲いた前世の空に生まれ変わりたい！

だが、悲しいかな！ 〈この世〉が<sup>あるじ</sup>主なのだ。その強迫観念は  
 ときにはこの安全な避難所まで私に吐き気を催させにやってくる、  
 そして〈愚鈍〉の不潔な反吐が  
 蒼空の前で鼻をつまむのを私に強いる。

手段はあるのか？ おおその苦さを知る 〈私〉、  
 怪物によって侮辱されたそのクリスタル・ガラスを突き破り  
 羽毛のない両の翼で逃れる手段は  
 ——永遠のあいだ落下する危険を冒して。

「窓」は象徴派の「人生を否定する」態度の例としてしばしば引用されてきたし、確かにマラルメは、同封の手紙の中で「この浮世の世界の幸せは卑しいものでしかあり得ない」という見解を付け加えた。しかしこの詩は、彼がちょうど味わったばかりの危機の象徴的な描写よりはるか以上のものである。肝心なのは、瀕死の男が重い足取りで窓に向かって行くことができ、そうするとその「悲しい施療院」の恐怖が、室外の眺めの壮麗さの中にすっかり消えて、溶けていくという点である。21歳のマラルメが本当にしていたことは、現実というものの概念全体に疑義を差し挟み、ぼろ切れ、悲惨、〈男〉が余生を送らなければならない臭い病院の悪臭が、芸術と神秘主義という一對の逃げ道を通して彼に自らを捧げる「緋色と芳香の河の上の、白鳥のように美しい金色のガレー船」以上に真実であるか否かを自らに問うことだった。この瞬間から、マラルメの人生はこれらの触知できない光輝の美的表現に完全に捧げられることになった。そのうちに、確かに、こういうものは単に想像の世界に属するだけではなく、人生についての本質的な真実を表しているのだと彼は信じるようになった。これが恐らく、詩人の唯一の務めは「世界のオルフェウスの解明<sup>18)</sup>」を追求することだと、ヴェルレーヌに語った時、彼が意味したことであろう。その時から、初めは人生の基本的な物が完璧な美へと変えられ得る方途、次に、それから新しい要素、詩の純粹

な成分である「溶けやすくて澄んだ、予知への贈り物<sup>19)</sup>」を獲得するために、もっと厳粛で抽象的な精神で、この基本的な物自体を「無効にし」、「無にする」方途を彼は探り始めたのである。

(この項了)

### 訳者後記

ここに至って、小見出しの「料理の匂い」の由来が明らかにされる。これは、本文中にあるように1863年6月3日付のカザリス宛書簡中に見られる表現である。‘smell of cooking’はフランス語原文では‘odeur de cuisine’であり、日本語版全集の訳は「厨房の臭い」となっている。フランス語を解する者にとっては周知のように、‘cuisine’には「料理」と「キッチン」の意がある。筆者は前者の意に解したということになる。英語の‘cooking’には、言うまでもなく「厨房」の意味はない。ここではどちらに訳しても大きな意味の違いは生じないだろう。

この言葉は、言ってみればマラルメの現世に対する認識を端的に物語ったものである。マリーとの共同生活の中から平凡な日常が始まった。その中で詩人として生きていく困難さを予見しているかのようなのである。マラルメは、大革命以来、ブルジョワジーの支配する世の中であって詩人という存在はどういうものなのかを生涯に互って考え続けた。それは「自らの墓石を刻むこと」(「文学の進展について——ジュール・ユレのアンケート」)しかできない存在である。ここにはもはやユゴー流の民衆を導く矜持に満ちた存在としての詩人はいない。まさにロマン派は絶えつつあったのである。そこに、マラルメがかつて範としたボードレールから決定的に離反したとされる詩篇「窓」をここでも筆者が重視する所以であろう。ここにマラルメの世界が誕生したのである。

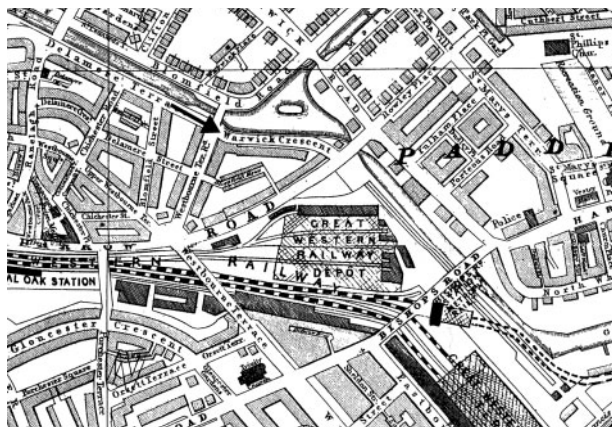
ここではまさに表題に象徴されるマリーとの離別と再会、さらに結婚に至る経緯が紹介されるが、そうした詩人のロンドンでの生活において、重要な役割を果たしたヤップ家の人々、そしてシュヴァリエ・ド・シャトランとの関係がこれほど詳しく論じられる文献は数少ないという意味で、本論は貴重

な資料となる。ヤップ家との関係で言えば、単に生活面のサポートの恩恵に浴したばかりでなく、詩人の『最新流行』や『マザーグース集』の構想に直接関わった形跡が見られる。シュヴァリエ・ド・シャトランの『英詩の美』(*Beautés de la poésie anglaise*)は、マラルメの『英語の美』(*Beautés de l'anglais*)と表題が酷似しているだけでなく、その第1巻に掲載されているポーの詩篇「大鴉」、「鐘」は、シャトランによる韻文訳が掲載されている(pp.212-221.)が、これはマラルメによる散文訳と好対照をなしている。詩人はこの老詩人＝翻訳家の業績がどこか頭の片隅にあったと想像しても大過なからう。

以上の点において、この箇所は、我々マラルメを研究する者にとって興味深い詳細を提供するものとなっている。

註(数字は原註、アルファベットは訳註)

- 1) アンリ・モンドール『マラルメ伝』、パリ、1941、p.74〔1862年11月26日付メラニー・ローラン宛書簡、『マラルメ資料』(*Documents Stéphane Mallarmé*, V, Nizet, 1976)、p.388.] .
- 2) 『悪の華』の「ちっぽけな老婆たち」。
- 3) ローレンス・ジョゼフ「マラルメと彼のイギリスの女友達」、『フランス文学史評論』、65、7月－9月1965年、pp.457-78.)
- 4) 「詩の危機」〔第30段落〕。この記事は1892年3月26日の『ナショナル・オブザーバー』紙に〔「フランスにおける詩と音楽」というタイトルで〕載った〔のちに散文集『ディヴァガシオン』(1897)において「詩の危機」の一部をなすことになる〕。
- 5) マラルメの計画した『マザーグース集』は、1881年に放棄され、C. P. バルビエ教授によって編集され、1964年にガリマル社から出版された。童話詩のいくつかはウォルター・クレインの『赤ん坊の宴』(1878)から採られているが、マラルメはそれらを、1年前〔1880年〕に出版された『英単語』に採り入れた。だから、彼がそれらを、この日付より以前に知っていたたった一人のイギリスの子供から直に学んだということもあり得るように思われる。自分の生徒たちの教育のために、マラルメは童話詩を援用し、そこから作文と宿題を課すだろう。「コック・ロビン」は彼自身の反応を物語る一例である。ここにはマラルメ自身の流儀の英語における作文がある。「何という奇妙な絵だろう！ 自分のヴァイオリンを持ったこの猫をごらん。でもそれだけじゃない。ここには月と、猫の上を飛び越



ウォーウィック・クレスセント

出典：『地図で読む』 ヴィクトリア女王時代のロンドン (時代別ロンドン地図集成)  
本の友社、1997年。

える雌牛がいる！ 私はこんなおかしなものを見て笑うその小さな犬のようだ。そんな眺めを見ると、私のいろんな考えがお互いを追いかけているように私には思える。ちょうど同じ童話詩のなかで皿がスプーンを追いかけるように」。

- 6) ジャン＝バチスト・フランソワ・エルネスト・ル・シャトラン (1801-81)。一般にシュヴァリエ・ド・シャトランとして知られている。
- 7) 『英詩の美』、5巻、ロンドン、1860-72。
- 8) 『我々の記念碑』、個人出版、1868。
- 9) キャステルノー・ロッジ、ウォーウィック・クレスセント。その家は、当時はリージェンツ・パークを見下ろす素晴らしい眺めが楽しめた。〔近隣にはロバート・ブラウニングも住んでいたという。〕
- 10) これらは本論執筆中には依然として未発表である。大部分は日付がなく、年々経つにつれて益々専ら、シャトランの好みと、妻の死の前にかかる精神障害を扱っている (ドゥーセ図書館、パリ)。
- 11) シャトランからの手紙 (ドゥーセ図書館) [1866年5月25日付、『書簡集』、第4巻 (Stéphane Mallarmé, *Correspondance*, IV, 1890-1891, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor et Lloyd James Austin, ★ ★ Supplément aux tomes I, II et III, Tables, Gallimard, 1973)、p.355.]。この詩は「陽春」(Renouveau) になった。
- 12) 同上。

- 13) 「大鴉」と「鐘」。
- 14) 「冬の戦慄」。この散文詩は1864年にトゥルノンで書かれた。
- 15) カザリスはこの頃エティーとの最初の不和の苦しみ<sup>きなか</sup>の最中<sup>なか</sup>にあった。彼の彼女との関係は、マラルメとマリーとの間の関係と異なっているわけではなかった。彼も現実のエティーよりはむしろ自らの創作の理想を愛していたように思われる。そこで彼は友人マラルメに書く。「僕が一人の女性を愛するのを止める時、同時にそれは終わる。彼女は、僕のところに1日間、或いはたった1時間、少しも崇高ではない存在として現れてくれれば、十分なのだ。そうすればお終いだ」〔『書簡集』(Stéphane Mallarmé, *Correspondance, 1862-1871*, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor avec la collaboration de Jean-Pierre Richard, Gallimard, 1959)、p.87.]。
- 16) 恐らく1864年の終わり頃、トゥルノンで仕上げられた「冬の戦慄」。
- 17) この詩は後に「〈希望〉の城」と題された。
- 18) 「自伝書簡」〔1885年11月16日付ヴェルレーヌ宛書簡〕。
- 19) 「詩の危機」〔第30段落。引用は‘fusible et clair présent à la divination’となっているが、正しくは‘fusible et clair présenté à la divination’（「予知で示された、溶けやすくて澄んだ〔第三の相〕」）である。]
- a) この女性は、『書簡集』(p.25.)の註に拠れば、「ル・パピヨン」誌の創始者で、「美しい長」(belle directrice)でもある。
- b) « Notes nouvelles sur Edgar Poe », in Baudelaire, *Œuvres complètes*, II, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1976, p.333.
- c) トーマス・カーライル Thomas Carlyle (1795-1881) スコットランド出身の批評家・歴史家。ロマン主義的な個人主義の立場から歴史における英雄の力を強調。主著、『フランス革命史』(1837)、『英雄崇拜論』(1841)。伝記、『オリヴァー・クロムウェル』(1845)、『フレデリック大王伝』(1858～1865)。彼の住まいのあるチェイニー・ウォークは、ロンドン南西部のチェルシー地区にある、テムズ河沿いの大きな通り。彼の家はチェイニー・ロウ24番地にあり、現在も保存され観光スポットになっている。
- d) ‘The Queen’紙には、‘Eliane de Marsy’または‘E. de \*\*\*’という署名が確認できる。この新聞のコラム欄‘Causerie de Paris’にはその‘E. de \*\*\*’という署名が入っているが、この題名自体がマラルメの『最新流行』における‘Chronique de Paris’を連想させる。尚、私見によれば、‘The Queen’紙にはファッションのイラストも見られ、マラルメが『最新流

行』を編むに当たって、ここから幾ばくかのアイデアが提供されたと考えられる。さまざまなペンネームの使用しかりである。ステンメッツによる伝記 (Jean-Luc Steinmetz, *Stéphane Mallarmé : L'absolu au jour le jour*, Fayard, 1998, p.145.) には 'Éliane de Marsys' と記されているが、これは著者の誤記によるものであろう。

- e) 類似の表現は、アンリ・モンドール『マラルメ伝』、p.414. 及びオースチン・ギル「教育公務員マラルメ」、『フランス文学史評論』、68、3月-4月1968年、p.269. に見出されるが、正確にこの筆者による英訳通りの文言は見つからなかった。
- f) 結婚前の名前はクララ・デュ・マゼ・ドゥ・ポンティニー (Clara Du Mazet de Pontigny)。1807年生。
- g) ウィリアム・ハリソン・エインズワース William Harrison Ainsworth (1805-1882) マンチェスター出身の歴史小説家。『ルクウッド』(1834) で一躍有名になる。実在の名高い強盗を主人公にした『ジャック・シェパード』(1839) も人気を博し、いわゆるニューゲート・ノヴェルをめぐる論争の渦中に。1830~40年代が人気のピークで、ディケンズ、サッカリーらとの交流もあった。
- h) エセックス州の村ダンモウで挙式後満1年と1日幸福に仲むつまじく暮らした夫婦に贈る塩豚の片側。
- i) ここで話題になっているシュヴァリエ・ド・シャトランの妻、クララ・シャトランのペンネームか。
- j) 『書簡集』(p.59.) では「11月30日」となっていたが、『マラルメ資料』(*Documents Stéphane Mallarmé*, VI, présentés par Carl Paul Barbier, Nizet, 1977, p.95.) では「12月28日か30日」と訂正され、『書簡集』の後の巻〔*Stéphane Mallarmé, Correspondance*, XI, Supplément, errata et addenda aux tomes I à X (1862-1898), Index général, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Gallimard, 1985, p.109.〕では「12月30日」と訂正されている。
- k) 「哀れな」と訳した語の原語は 'povero' というイタリア語で、フランス語の 'pauvre' に当たるが、『書簡集』(p.75.) ではイタリックになっている。なぜカザリスがわざわざイタリア語を使ったのかは不明。彼はもう1箇所別の書簡でもこの語を用いている。尚、この書簡は『マラルメ資料』には当該箇所に見当たらない。